官民連携「現場見学、意見交換」を通じた担い手、人材育成に関する取り組み

西光　裕香

近畿地方整備局 舞鶴港湾事務所 工務課（〒624－0946 京都府舞鶴市字下福井 910 番地）

現在、建設業界における少子高齢化の進行や建設業の社会的役割が増加する中で建設業における担い手確保が課題となっている。今回、近畿地方整備局舞鶴港湾事務所では、担い手確保や若手技術者の人材育成を目的に、舞鶴工業高等専門学校の学生を対象とした官民連携による地元舞鶴での「現場見学会、意見交換会」の取り組みを行い、担い手確保の問題解消の糸口を探った。本論文では、この取り組みの企画および取り組みがもたらした効果と今後の展望について紹介する。

キーワード　担い手、人材育成，官民連携

1.　建設業界における若手技術者確保の現状

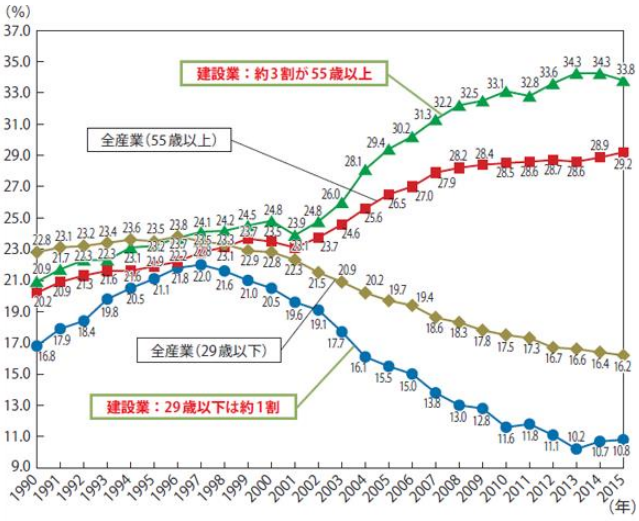
現在、建設業就業者の年齢構成において、55歳以上が約3割を占める一方、29歳以下の若手が約1割と全産業に比べ、高齢化と若手比率の低下が著しく進行している。[1)]また、防災・減災、老朽化対策及びインフラの維持管理など建設業の役割が増加する中で、労働人口の減少や少子高齢化、これまで続いた建設投資の減少による若手技術者の減少が課題となっており、今後の担い手となる若手技術者の採用および育成は建設業界にとって大きな課題となっているところである。

また、建設業界の人手不足は工事発注を行う近畿地方整備局を含めた公共事業の品質確保への影響も懸念されているところである。

一方、建設業界においてリクルート活動を行う中で技術者職員の採用については、きつい、危険、汚いといういわゆる3Kや休日出勤、転勤が多いなどのマイナスイメージを拭いきれず苦労しているのが現状である。

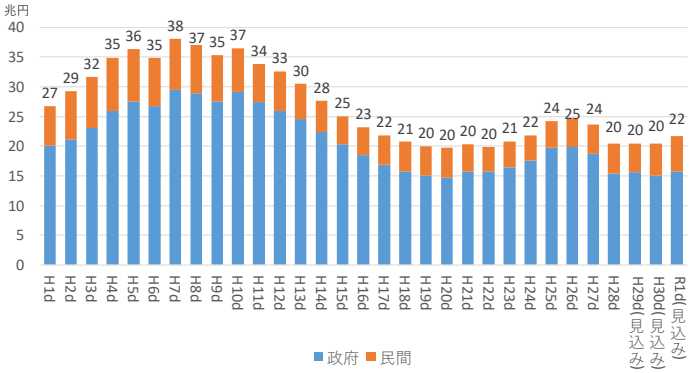
近畿地方整備局でも近年リクルート活動に力を入れており、積極的な説明会や現場見学会を行っている。しかし、企業と違いリクルート活動や国家公務員の役割をPRするにあたって必ずしも十分に情報発信できていないことが現状である。

大学や工業高等専門学校(以下、高専)では、土木分野の学科に所属する学生でさえも建設業への道を選ばない学生も多い状況で、今回取り組みを行う舞鶴港湾事務所の所管である港湾関係に至っては講義自体が減ってきており、「みなと」に関心を持つ以前に「みなと」に関する知識や情報すらも乏しい状況である。



(注)　2011年データは、東日本大震災の影響により推計値
資料）総務省「労働力調査」より国土交通省作成

図－1　若手比率の低下、高齢化の進行 [1)]



図－2　建設投資見通し(土木)[2)]

2. 取り組み実施にあたって

(1) 実施背景

日頃より建設会社の職員と仕事をする中で、建設業界のリクルート活動や採用状況における担い手確保の厳しい現状を伺っていた。

舞鶴港湾事務所では、港湾分野に関心を持ってもらうため、以前より舞鶴高専の4、5年生の学生を対象とした講義や現場見学会を実施しており、この取り組みを官民連携により実施することで前述した建設業界の課題を解消できるのではないかと考えた。

以上より、舞鶴港湾事務所と地元の港湾建設業の団体である京都府港湾建設協会との官民連携による担い手、人材育成に寄与する取り組みとしてイベントを開催することとなった。

(2) 実施にあたっての検討

イベントをより有意義なものにするため、過去に行ってきた取り組みを含めた実施方法を4つの観点で検討した。

1点目は職員が高専を訪問し説明会を行う方法である。リクルート活動の一環として現在行われているものの多くがこのスタイルであり、例年舞鶴港湾事務所でも行ってきた。今回のイベントとしては建設業や「みなと」に関心を持ってもらうことも必要であり、訪問して詳細な業務説明を行う場としてはその次の段階ではないかと考えた。

また、多くの学生を対象とし、一度に情報の発信をできるメリットはあるが、時間が限られていることなどからすべての質問に答えることができないことや、遠慮がちな学生からの質問が出にくいなどの課題がある。

2点目は現場見学会を行う方法である。この方法には官民が個別で行う場合、以下の課題が挙げられる。

近畿地方整備局の見学会だけでは工事現場の詳しい施工の状況や施工管理といった内容を伝えることが難しく、一方で建設業界の1会社のみでは建設業の魅力の一つである大きな規模の事業全体を伝えることが困難である。今回は官民が連携することとし、既に供用している施設、工事中の施設などを発注者側、施工者側の両者の視点から施設の全体を見学できるのではないかと考えた。

3点目は1対1や少人数での面談形式で説明会を行う方法である。今回は同じ学校の学生同士で参加するため、複数人の学生と官民の3者の少人数で行うことで、話しやすい雰囲気作りが可能になるのではないかと考えた。また、意見交換会という形をとることで、学生の話も聞きながら学生1人1人に合った回答ができる。

4点目は職員の中でも当該学校出身者により説明する方法である。今回は舞鶴高専といった特定の学校出身者を確保することは難しかったが高専ならではの質問などに対応し、より学生により親近感を持ってもらうため、3点目に挙げた意見交換会にできるかぎり高専出身者の協力を得ることが重要でないかと考えた。

以上の4点を踏まえ、以下の「リクルート、担い手確保の活動への課題」と「就職、職場のイメージ」を留意しながら「現場見学会」及び「意見交換会」を実施することで今までの取り組みの実施方法の弱点を打開し、担い手、人材育成を行うことで将来の若手技術者確保の第一歩となるイベントの企画を進めることとした。

【リクルート、担い手確保の活動への課題】

〇近畿地方整備局

・PRするにあたって情報発信の方法に限界がある。
→多くの事業がある中で現場や取り組みに携われる魅力をうまく伝えきれていない。

■民と連携
企業ならではの魅せ方と建設業のより専門的な視点で現場を感じてもらえる。

〇建設業界

・学生に対して直接情報発信する機会が少ない
・長所がうまく伝わらない
→最近の建設業の現状が広まっていない。
→工事している部分しか見せることができない。

■官と連携
構造物の完成までの全体像とともに建設業の魅力を上手く伝えられる。

⇩

官民連携した現場見学会

【就職、職場のイメージ】

〇近畿地方整備局

・競争率が高のでは
・そもそも採用してもらえるのか
・長距離異動(地方公務員を選択する学生が多い)
・堅い

＋

〇建設業界

・3K(きつい、危険、汚い)
・男性社会(女性が働く不安)

⇩

職員との意見交換会

(3) イベントの企画

当日は、現場見学会で近畿地方整備局及び建設業界の事業や仕事を知ってもらった後、官民の若手職員との意見交換会を行うことにより職場の雰囲気を実感してもらうため、以下のようなスケジュールで進めることとした。

図－3　当日の流れ

前項で検討した現場見学会と意見交換会をより効果的な内容とするため、それぞれ詳細な内容の企画を行った。

現場見学会については、舞鶴港湾事務所で管轄している施設を淡々と回って説明を行うだけでなく、記憶に残るものをピックアップし、学生に体験してもらうことで「現場」や「みなと」を感じてもらうような工夫をした。具体的には、普段一般の人が入場することのできないコンテナターミナルでのガントリークレーンの搭乗体験や、港湾業務艇での港内クルージングを体験してもらい、ガントリークレーンの上や海上から施設を見学ししながら説明を行うようにした。また、工事の現場でも実際の現場の状況を見学すると同時にVRを使ったCIMによる現場管理状況を見もらうこととした。

見学の進行については、安全でスムーズな誘導手段を検討するため、参加学生へは事前に高所が苦手ではないかを確認したうえで、ガントリークレーンに登る班、登らない班に分けて説明を行うこととした。加えて、事前に女性職員が実際に登って確認することで当日のスケジュールの調整も行った。

意見交換会については、事前に官民及び学生の3者を少人数の班に分けた。これにより、学生側としては限られた時間の中で一度に官民それぞれの意見を聞くことができ、官民の側としてもそれぞれの利点を確認しながら質問に答えることができる。さらに男女のグループ分けを行うことで男女それぞれの質問もしやすくなるように工夫した。また、参加する官民の各職員の確保として学生が親近感を持って話せるよう、できる限り若手職員に参加を依頼した。

参加する官民各職員のプロフィール等の情報については、事前に自己PR冊子を配布することで学生が相手を把握し、話かけやすいよう配慮した。さらに、班員の近畿地方整備局の職員1名がメモを取り、司会をすることで話の流れを確認しながら、進行することとした。司会をする職員には遠方から参加する者もいたため、事前に進行の流れを示した手引きを共有することで、当日に円滑な進行ができるようにした。手引きの内容は、司会する職員から質問を投げかけることによって、各会社や学生に話す機会を与えるよう心掛けるようにした。

当日の準備としては、班ごとの配置にも少し距離をとるなど、それぞれ個別の空間で話すことで普段の説明会などでの質問しづらい雰囲気を少しでも解消し、職員と学生が交互になるように配置することで話がしやすいよう環境を整えた。

イベント後には今回の結果を今後のリクルート活動及び担い手育成活動に反映させるため、後日学生によるアンケートを実施することとした。

3. 取り組みの成果

(1) イベント当日の様子

当日は計17名の学生がイベントに参加した。

コンテナターミナルの見学では、ほとんどの学生が事前の確認でガントリークレーンへの搭乗を希望し、高さ約30mの位置までクレーンの階段を軽快に登っていた。

クレーンへの搭乗を希望しなかった学生についても普段立ち入りできないような非日常的な空間で学生たちの関心を引いていることが見て取れた。

写真－1　ガントリークレーンの搭乗体験

写真－2　コンテナターミナルで説明を受ける様子

次に工事現場見学会では、クルージングによる海上からの施設見学の後、さらに陸上で現地施工、VRでのCIMによる施工管理を確認した。特に新技術であるVRでのCIMの施工確認を興味津々に体験している様子があった。

写真－3　海上から施工現場を見学する様子

写真－4　CIM による施工管理を VR で体験する様子

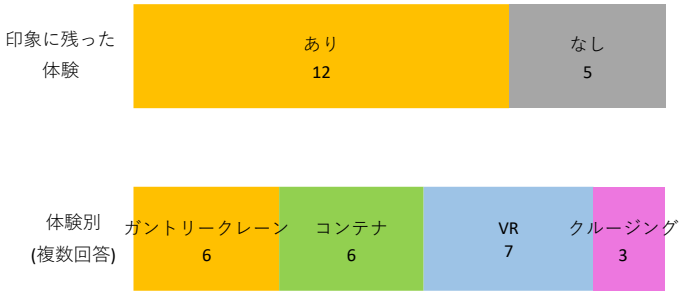
意見交換会では、どの班でも絶えず話をする様子があり、学生から職員だけでなく職員からも学生へ質問を行うことで話を広げることができた。どの班も話が非常に盛り上がっており、決められた時間を過ぎた後も職員から話を聞く学生が多くみられた。特に女性の班については個別で話を聞きに行くなど積極的に就職に関する質問をしている様子もあった。

写真－5　意見交換会の様子

(2)　アンケート結果

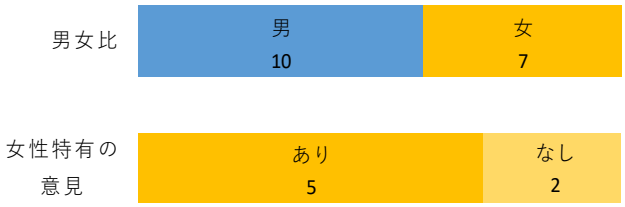
イベント終了後、参加学生に対して学んだ内容や感想を文章形式でアンケートを実施した。

イベントに参加した17名のうち印象に残った体験を挙げた学生は12名であり、今回の現場見学会の企画時に考えた印象に残るイベント内容の項目がすべて挙げられていた。



図－4　印象に残った体験

17名の学生のうち、男子学生が10名、女子学生が7名だった。意見交換会での感想として女子学生7名のうち女子学生の過半数である5名が女性特有の意見を挙げた。その中でも「男性ばかりの職場でも女性が少しずつ認められていることが分かった。」といった男性社会のイメージがある土木業界に対する不安を少し解消できたというような意見もみられた。



図－5　参加者の男女比及び女性に関する意見

また、学生の感想の中には、土木業界にあった福利厚生や仕事環境のネガティブなイメージをもっていたが、改善されたという意見や、他のリクルートイベント以上にいろいろな話が聞けた等、このイベントに対して好感を持つ感想も見られた。

4. まとめ

(1) 考察

企画段階において本イベントによる以下2点の課題解消を期待した。第1にリクルート、担い手確保の活動への官民それぞれの課題を官民連携の現場見学会により解消すること。第2に就職、職場のイメージを職員の意見交換会により解消することである。

第1の現場見学会については、今回施設全体を見学することで建設業界の役割を明確に学生に伝えることができたのではないかと考える。また、工事現場の泥臭いマイナスのイメージがVRといった新技術を使った施工管理を実際に体験してもらうことによって、資料やパワーポイントによる説明以上に進歩している現場の状況を学生に理解してもらう機会とすることができた。

第2の意見交換会については、少人数で行い、若手職員により話しやすい和やかな雰囲気作りを始めにすることで、学生からも率直な意見や感想を聞くことができた。また、司会する職員により各職員に話す機会を設けることでそれぞれの職場、会社の魅力を話すことができ、アンケートの内容でもマイナスのイメージを持っていたが改善できたというような感想が得られたのではないかと思う。さらに、アンケート結果でも意見交換会に好感を持った意見や、意見交換会後も学生たちが職員と打ち解けた様子があり、就職に対する不安や職場に対するマイナスのイメージも解消することができたように見て取れた。

以上の2点に加えて今回のイベントを企画するにあたり、「学生の記憶に残る」イベントとなるよう心掛けていた。今回実施したアンケートは、文章形式のもので印象に残るイベントを質問するものでは無かったが、17名中12名のほとんどの学生が、印象に残ったものを自主的に挙げており、企画したほとんどの項目がまんべんなく挙がっている。アンケート結果や当日の学生の様子からも学生の中で記憶に残るイベントになったように見て取れる。

また、各若手職員にとって、日頃は発注者側、受注者側として仕事を行う相手ではあるが、実際に若手職員同士では直接交流する機会が少なく、各職場での一面しか理解できていない。

今回3者での意見交換会など、イベントを通じて官民の若手職員が交流することで日々進めている事業や日頃の業務をより把握し、理解することができた。こういった取り組みを続けることで若手技術者の人材育成にも繋がっていくのではないだろうか。

ご協力いただいた京都府港湾建設協会に所属する建設会社の方々からも、イベントに対する好感を持った声をいただくことができた。

(2) 今後の展望

本取り組みの企画からイベント実施までを通して、担い手、人材育成の第一歩として事業の全体を含めた施工現場や仕事内容を学生に理解してもらうことができたように感じる。

本取り組みだけでは、担い手、若手技術者の確保ができたとは言えないが、今回の取り組みを通して、得られた結果を元に試行錯誤し、舞鶴港湾事務所として取り組みを継続する予定である。

また、イベントを継続していくことで担い手、若手技術者の確保、人材育成のシステムを確立することができるのではないだろうか。

一方、現在新型コロナウイルスの影響で、直接学生へアプローチできる同様のイベントやリクルート活動が困難な状況である。しかし、今回の企画で心掛けた「印象に残る」体験を動画等を活用し学校に提供、配信をするなど実施方法を工夫することで今回の取り組み結果を活用できるのではないだろうか。

参考文献

1) 平成28年国土交通白書 Ⅰ 第1章 第1節 P3
2) 国土交通省 ホームページ
「建設投資見通し」 平成23年度－令和元年度